

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連
223
載

目指せ、メガネ美人

メガネは、世界で一番普及した福祉用具だといわれる。

江戸時代、最も多い病気は目の病だったとの記録がある。今のような病名はなかったが、どうやら結膜炎や白内障に悩まされたのではないかと推察できる。天然痘や麻疹の合併症として失明することもあったことを思うと、目の病気や盲人は今よりずっと多かったと思う。

日本にメガネがお目見えしたのは、戦国時代のこと。宣教師のメガネを見て、織田信長が驚いたという逸話が伝わる。また、静岡の東照宮には徳川家康の使用していたメ

ガネがまことしやかに陳列されている。べつ甲に縁取られた丸い形のメガネを見ると、神君だとわかっていても、途端に親しみを覚えてしまう。

中学生の頃、メガネの似合う美しい人に出会った。音楽の教師だったその人はまだ若く、私には眩しい存在だった。決して美人とはいえないが、メガネの奥の瞳はいつもキラキラ輝き、笑顔に溢れていた。心が綺麗だからよ、と母は言った。それ以来、少々顔の作りが良くなっても、心さえ真っ直ぐなら、きっと自分も美人になれる、と固く信じ続けた。

長い間、メガネは負の

イメージだった。メガネをかけた子は、真面目、ガリ勉、かたぶつの印象があったり、メガネザルと呼ばれ、からかわれることもあった。今のよう



うことだろう。ところが時代は変わった。今や、メガネは福祉用具という本来の役割を超え、個性そのものになりつつある。いつの間にか、服や時計と同じようにメガネもファッションアイテムの仲間入りを果たし、日によつて違うメガネをかけることも珍しくはなくなつた。目が悪くないのに、メガネが好きで違うフレームのメガネをとつかえひつかえして楽しむ、いわゆる伊達メガネの人もある。

ヨナブルなものではなかった。メガネは変装の道具としても重宝されてきた。メガネに加えて、帽子を深くかぶれば、誰だかわからなくなってしまう。それだけ、メガネが人の人相を変えてしまうとい

私、私も長くコンタクトレンズをしていたが、最近はおっぱらメガネをかけるようになった。何よりコンタクトレンズより楽で、手入れも簡単。さらに、思いがけない発見のひとつに、メガネは目尻のシワを隠してくれる。また、たるんできた頬のあたり

が、それほど気にならなくなってきたのもメガネのおかげかもしれない。ただ、最近はマスク必須のご時勢だ。メガネ、マスク、熱中症予防のための帽子…、まるで変装の3点セットである。おしゃれであり続けたい私にとって、マスクは邪魔で仕方がない。何せ、顔の半分以上が隠れてしまいい、人相どころか表情がまったくわからない。目は心の窓といわれるが、目だけでコミュニケーションを取るのとはとても無理だとわかった。

せつかく馴染んだメガネである。かつて憧れた教師のように、内面からにじみ出るような輝きを常に意識するのもまたよし。本物の、メガネ美人と呼ばれるためにも、一日も早くマスクを手放し、マスクなしの生活を楽しまたいと心から願う、今日この頃である。

イラスト・伊藤香澄